The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2013年南京市八卦洲調査報告
Author(s)	大坪, 慶之
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2016, 7, p. 86-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60263
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

調査報告

2013 年南京市八卦洲調査報告

大坪 慶之

はじめに

2013 年 9 月 1 日・4 日の二日間、南京市の北郊に位置する八卦洲にて、科研チームによる実地調査が行われた。八卦洲は、江心洲と同じく、長江に形成された中洲である。現在は、南京長江二橋がかかって洲の南北を高速道路が縦断しており、南京市内からも路線バスが通じている。ただ、八卦洲は江心洲とは違い、南京市中心部から公共交通を乗り継いで一時間以上かかる。そのためであろう、街道辦事処のある新街からバスターミナルにかけてのメインストリート付近では、店舗やマンションの建設が行われている一方で、多くの地区ではそれほど開発が進んでおらず、現在でも大部分が野菜や穀物を作る畑である。

八卦洲の形成時期や歴史の概略については、すでに簡単な紹介を行っているので［大坪 2008、pp.85-87］、本稿では今回の実地調査に関係する事項を簡単に整理したうえで、八卦洲の地勢と古老への採訪を中心に報告したい。

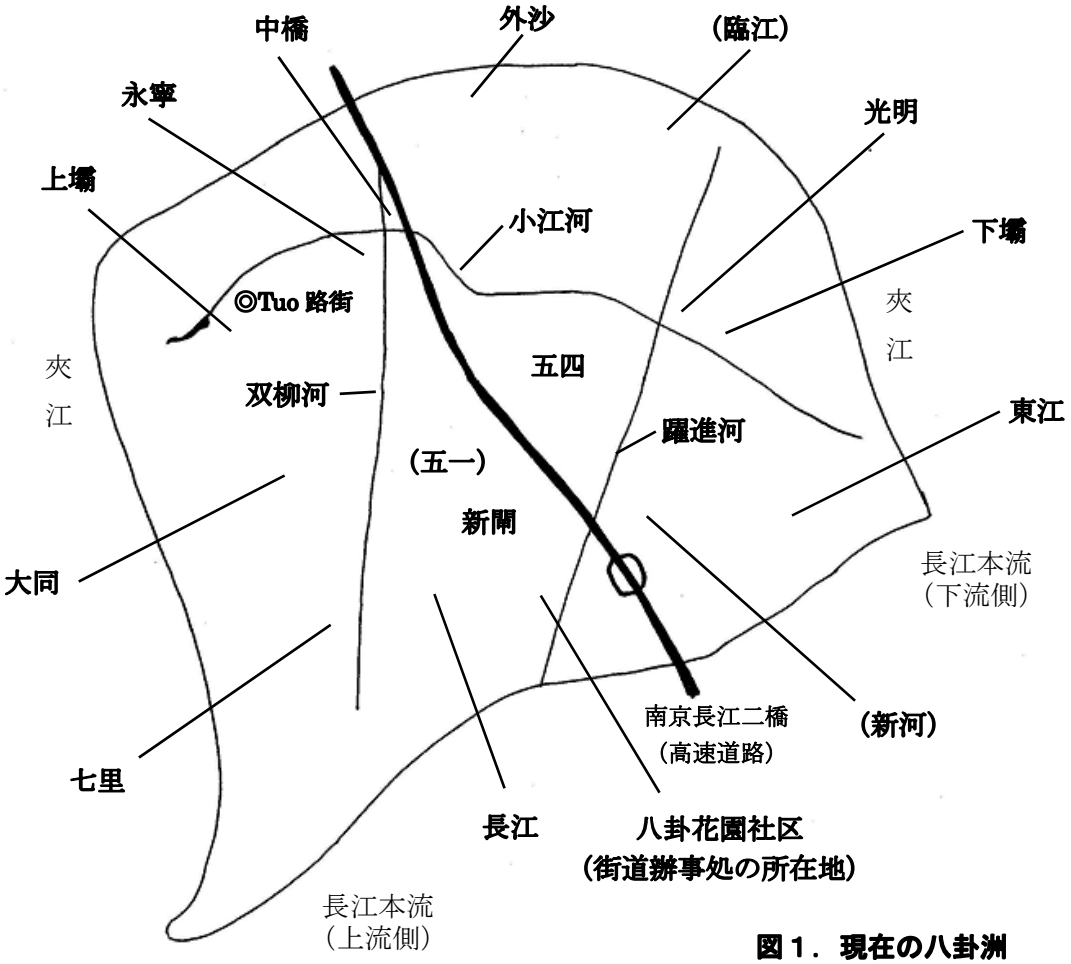


図 1．現在の八卦洲

１．八卦洲の概況

(1) 現在の行政区画

今回の調査に先立つ 2012 年 12 月、夏維中教授（南京大学）のご協力のもと、筆者は朱海濱教授（復旦大学）と八卦洲街道辦事処を訪ね、実地調査の協力を依頼した。その時に、辦公室主任の曹徳強氏より八卦洲の歴史に関する説明を受け[1]、資料をいただいた。それによると、八卦洲に関する行政区画は、大略次の通り変遷した。八卦洲は、国民政府が成立する 1927（民国十六）年に南京市に編入された。そして日中戦争後の 1948（民国三十七）年には、南京市第九区に属し、10 個の保と 157 個の甲に分けられた。中華人民共和国の成立後も、八卦洲は同じく南京市第九区に属した。1953 年 7 月に、江蘇省六合県に編入され、八卦洲区が設けられ、その下に、上壩（簡体字は「坝」）・中橋・下壩・巽离・七里の五郷が置かれた。1956 年 2 月、八卦洲は南京市に復帰し、燕子磯区に属することとなり、上壩・下壩・七里の三郷が置かれた。1958 年 11 月、三郷を合わせて八卦洲人民公社が作られ、南京市郊区行政辦事処の下に入れられた。その後、公社の所属変更や分割・合併を経て、栖霞区に編入される。そして公社は、1983 年 6 月に八卦洲郷と改称される。

現在の八卦洲は南京市栖霞区に所属し、その北部に位置する。2005 年に八卦洲街道ができ、12 個の行政村（村民委員会）と 1 個の社区で構成されることになる。村民委員会は、1999 年の時点では 15 個あったが、2002 年に進められた小村の合併により、現在の 12 個になった。その内訳は、洲の沿岸を西北部から時計回りに、上壩・永寧・中橋・外沙（旧外沙村＋臨江村）・光明・下壩・東江（旧東江村＋新河村）・長江・七里・大同の計 10 個、そして洲の中心部分に五四と新閘（旧新閘村＋五一村）の計 2 個がある。さらに村民委員会の下には、185 個の村民小組が存在する。この他、2003 年に八卦洲の中心部に作られた集鎮である小城鎮居民区の範囲が八卦花園社区に設定されている（**図１**参照）。

(2) 民国期の地名と人口

国民政府期の八卦洲では、蘆葦が茂っていた中洲が順次開発されていく。開発の順序に従い、大きな堤防を単位に開墾地が頭歩墾[2]・二歩墾・南三歩墾・北三歩墾と名づけられ[3]、それが日常的にその区域を呼ぶ際にも使われるようになる（**図２**参照）。日中戦争後に発行された『南京市政府公報』によると、その開発過程は次のようであった。最初に開発されたのが頭歩墾である。ここは 1929（民国十八）年、南京市政府が本格的な開墾に着手し、28700 餘畝の土地が開かれた。そして、1930 年に堤防工事が完成し、その中が「乾・坎・艮・震」などの字号に編成された。また開墾には、安徽省無為県から多くの人がやってき

---

[1] 2012 年の八卦洲訪問時の記録については、朱・大坪 2014 を参照。

[2] 後述の聞き取りでは、古老が「墾 ken」ではなく、堤防を意味する「埂 geng」の字を使っている〔採訪①〕。一方で、『南京市政府公報』などの文献資料では、「墾」と記されている（**図２**も参照）。両者は発音が近く、話の内容からも同一の区域を指していると判断できる。「墾」と「埂」の違いについては、今後の調査を進める中で検討していきたい。

[3] 国民政府期の八卦洲開発の歴史については、大坪 2008、pp.86-87 を参照。なお、八卦洲の 1948 年時点での開墾地は、頭歩墾 28000 餘畝、二歩墾 9000 餘畝、南三歩墾 6000 餘畝、北三歩墾 8000 餘畝、外灘 1000 餘畝とされている［「籌議改良八卦洲洲地」『南京市政府公報』4-4、1948 年、p.77］。

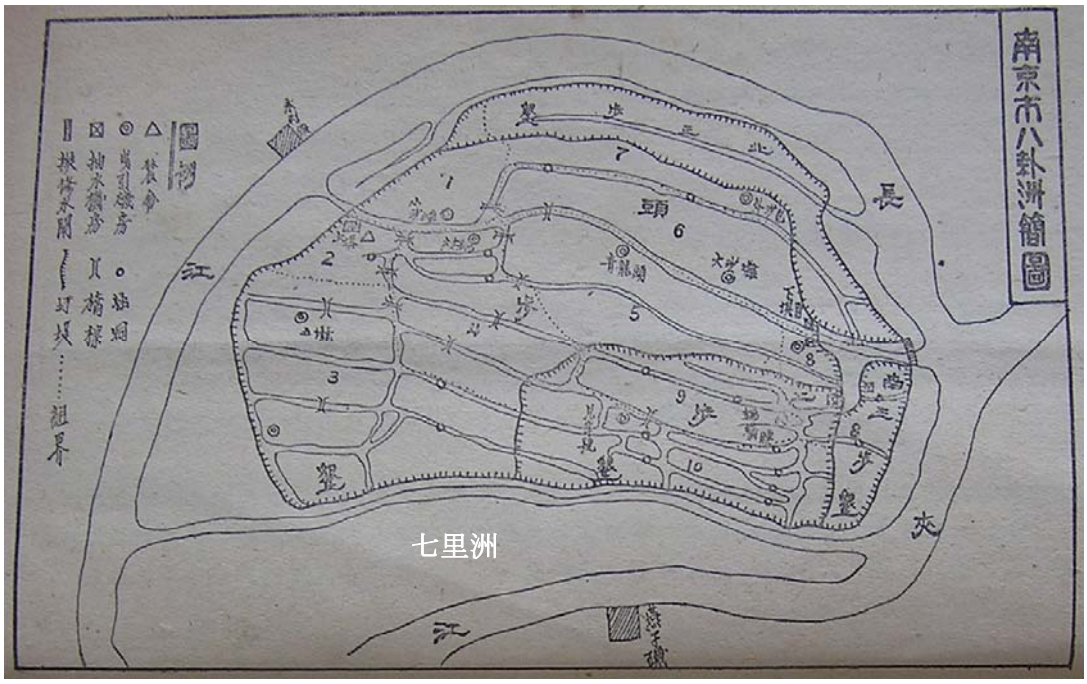


図２．民国期の八卦洲（1940 年代後半ごろ）

出典：中国農民銀行南京分行（編印）『本行與農業推広委員会共助 南京八卦洲農民使用農業機械工作報告』出版年不明（内容的に 1940 年代後半と推察される）、p.2 より転載。

て、堤防作りなどの作業に従事したと言われている。

1936（民国二十五）年、二歩墾の開墾が始まり、翌年には堤防が完成する。開かれた土地 9000 餘畝は、「巽・離・坤・兌」の四字号に編成された。続いて南三歩墾・北三歩墾が開発され、開かれた合計 7000 餘畝の土地は「元・亨・利・貞」の四字号に編成された。その後、日本占領時期に相前後して、さらに南三歩墾に 3000 餘畝、北三歩墾に 4700 餘畝の土地が開墾され、南北総計 14700 餘畝となった（註 3 参照）。そして国民政府期に定められた「元・亨・利・貞」の字号は取り消され、区画が変更されることになる[4]。

1947 年 5 月の戸口統計によると、当時の八卦洲は、住宅戸数 2000 戸余り、人口 12000 人程度であった。居住者は、その大半が安徽省無為県の出身者で構成され、次に多いのは江蘇省六合県であった［大坪 2008、p.85］。

（3）自然環境

2012 年 12 月に街道辦事処でいただいた資料は、八卦洲の自然環境を、次のように説明する。八卦洲は長江にできた中洲で、すり鉢状の形をしている。土地は、西北側（上流部）が東南側（下流部）よりやや高くなっているが、全体的には平坦で、海抜は 5.5～7.0m（海抜の 0m 基点は上海の呉淞口）である。その大部分が海抜 6.5m 以下で、それより高い所は

[4] 「八卦洲墾佃概況」『南京市政府公報』4-4、1948 年、pp.89-90。

主に西北部を流れる小江河の両岸に分布する。その小江河は、八卦洲の東西を貫き、躍進河と双柳河が南北に走る[5]。他にも、人工的に開削された小さな水路や運河は 300 条余りある。1999 年の調査では、八卦洲の広さは 53.92 平方キロメートル、そのうち耕地が 51024.9 畝、水域面積（運河や水路の面積）が 18245.98 畝、林業用地が 853.47 畝となっている[6]。

気候は「亜熱帯季風気候区」、すなわちモンスーン（季節風）の吹く温暖湿潤気候で、四季がある。雨は 6～9 月に多く、年平均降水量は 1000～1100mm、年平均気温は 15.4 度（1 月の平均気温は 1.9 度、7 月のそれは 28.2 度）、霜が降りない日は年間 237 日ほどである。

２．八卦洲の景観

2013 年 9 月 1 日、科研チームの 3 名（片山剛、大坪、山本一）はタクシーで数地点を散策しながら景観調査を実施した[7]。午前中は、南京市街から乗った路線バスのターミナル（終着点）である「総站」から、開発初期段階に作られた古い街である Tuo 路街へ行き、付近を散策した。午後は、北側の堤防沿いをタクシーで走り、①三頭湾（旧北三歩墾）、②七里洲（最上流部）、③七里村と回って「総站」に戻った。なお、文中の「Tuo」は、〈偏が「車」、旁が「它」〉の一字で、『新華字典』にも出てこない、当地域特有の字である（**写真１**）。

（1）最初の中心地—Tuo 路街

民国期から 1963 年まで、八卦洲の政治・文化の中心は Tuo 路街（上壩に所在）であった。この街は 1930～40 年代に作られ、小江河の南岸西寄りに位置する（**図１**）。そして以前は、ここに碼頭があった（**写真３**）。この地に開発初期の中心地が置かれた理由は、八卦洲の上

写真１．Tuo 路街を示す標識

2012 年 12 月の訪問時に撮影

写真２．Tuo 路街の様子

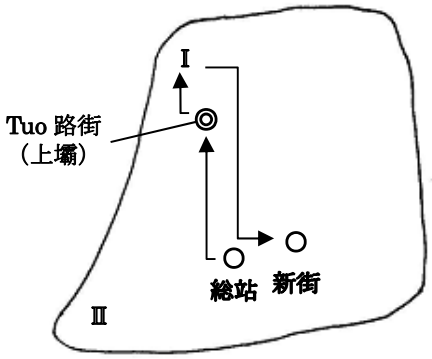
手前が民国期の建物

[5] 曹徳強主任の話によると、小江河は民国期の 1940 年代に完成しており、全長は約 9 キロメートル。また 1960 年頃に開削された躍進河は、全長約 8 キロメートルとのことである［朱・大坪 2014、p.101］。

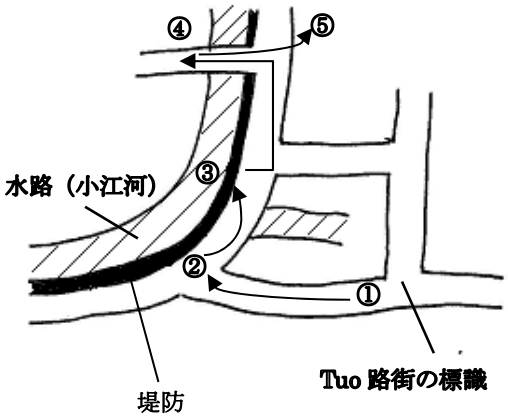
[6] 曹主任の説明では、1998 年の洪水で、西北部分の土地が削られたという。また民国期と比べて、最上流の先端部分（西南部分）も、洪水で短くなっている（民国期の地図に見られる大灘・小灘（後出**図５**の左下部分）は、現在なくなっている）。これらに沙洲形成も加わり、民国期と比べて、現在は長江本流と夾江は反対になっているとのことである［朱・大坪 2014、pp.101-102］。

[7] タクシーの運転手は当時 45 歳で、老家は江浦県にあったが、1940～50 年代に父親が開発で八卦洲に来たとの話であった。

【1 日午前移動ルート】



◎Tuo 路街付近（小沙・上壩）



① 両側に建物がならぶ（民国期の建物あり）〔**写真２**〕
② 堤防。この辺りが昔の碼頭。現在は、水門あり。地名は上壩〔**写真３**〕
③ 堤防沿いに、まばらに建物がある。堤防と家屋の間に畑がある。
④ 農地に入る。地名は小沙西。
⑤ 堤防から下りて、植樹林をぬけ奥の農地へ〔**写真４**〕。地名は上壩。

流部にあたり、地勢が比較的高かったことによるものだろう。ここには、現在でも往時をしのぶ民国期の建造物が残されている（**写真２**）。また、火事や改築で消失してしまったが、かつての萬字会（卍会）の建物も残されていたという［朱・大坪 2014、p.100］。

（2）現在の農地

八卦洲の農地は、全体的に土地を耕しただけの畑が多く（次頁**写真４**）、江心洲のような果樹栽培は行っていない[8]。散策した小沙西の農地も同様で、宅地の奥に位置する。堤防沿いにある宅地は、少し高いところにあり、それより低い農地との高低差は約 50cm である。植えられている作物は、トウモロコシ・大豆・芦蒿 Luhao（後述）・ヘチマ等である。

水路を挟んだ東側にある上壩の農地は（⑤）、堤防の脇に植樹された林を抜けた奥にある。このような堤防（道路として利用）の脇に植林する光景は、八卦洲の至るところで見られる。散策地点の農地は、堤防より約 3m 低くなっている。そこでは、アワ・トウモロコシ等が作られている。また、農地内にある小さな水路をさらった盛り土と思われる土手に、大豆が植えられている。水路の水面は、農地より低くなっているので、排水用に整備された

[8] 八卦洲の西北と西南（【1 日午前移動ルート】のⅠとⅡ）は、人があまりおらず、未開発に近い土地が広がっている。

写真３．上壩の堤防（小江河の旧港付近）

写真４．八卦洲の農地（上壩）

写真５．農保界桩（上壩）

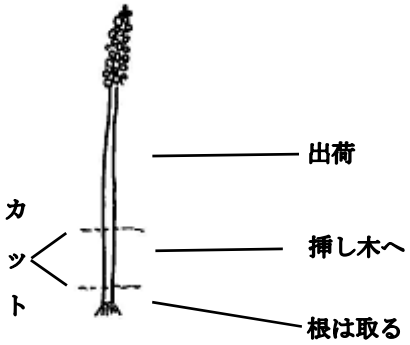


図３．芦蒿（カワラニンジン）

ものと推察される。この他、付近には「農保界桩」と彫られた石杭が打ってあった（**写真５**）。これは人民公社時代に、公社の土地を示す境界として使われていたとのことである。

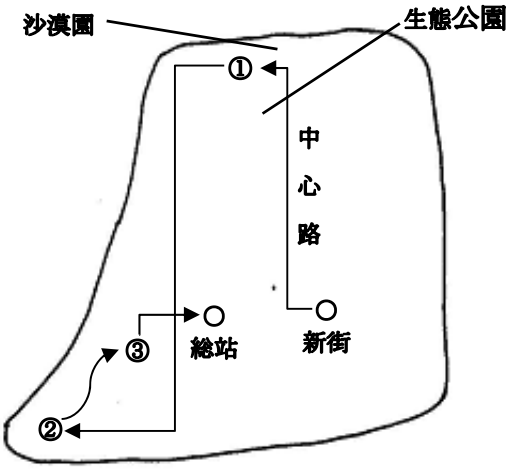
◆芦蒿（Luhao、カワラニンジン）

調査をしていると、現地の人が芦蒿（発音は Luhao）と呼ぶ、腰の高さくらいの作物が至るところで栽培されているのに気付く（**図３**）。これは、日本名「カワラニンジン」という作物である。栽培方法は、まず挿し木で植え、途中で何度か新芽を刈り取って太くする。そして収穫は根ごと引き抜く。根の張り方は浅く、草のようである。近年、南京市政府が推奨していることもあって栽培が盛んとなり、食用（香付けなど）として出荷されている。なお、タクシーの運転手の話によると、芦蒿の栽培が一番儲かるとのことである。

（3）八卦洲全体を取り囲む堤防と付近の景観

八卦洲の外側には、大きな堤防が築かれている。北側の夾江付近の光景は、江心洲の最下流部分と似ており、水面から堤防までの高さは約 3m ある。そして堤防の外側に、蘆葦が生えている。最上流部の先端部分（洲の西南）は、かなり内側に堤防が築かれるとともに、

【1 日午後移動ルート】



①三頭湾（旧北三歩墾）
・夾江付近の光景は、江心洲最下流部と似ている。

②最上流の先端部分
・一帯は、植林されている。
・人家はなく、人もほとんどいない。

③七里村
・農地では、芦蒿・トウモロコシ等を栽培している

一帯は植林され人家は見られない。これは、過去の洪水で土地が削り取られたために（註 6 参照）、地盤強化の目的で植えられたものと思われる。現在は洲頭観景台として整備されている。堤防の外側は、蘆葦が茂っている場所が多く見られる。

３．古老採訪

今回の調査では、南京大学の夏維中教授の手配で、呉昌明副主任（八卦洲街道辦事処）とテムル副教授（南京大学）のご協力のもと、9 月 4 日に科研チームの 4 名（片山、田口宏二朗、大坪、山本）が、計五人の古老を採訪した。以下、その内容をまとめることにしたい。採訪にあたり、①八卦洲に来た年代と経緯；②八卦洲に来た頃の仕事（開発に携わったか否かなど）；③萬字会（卍会）を知っているか；④燃料をどうしていたか；を中心に質問した。

採訪①：Ego　祁 SI（男性）

1924 年 5 月生まれ。採訪当時、満 89 歳。東江隊（東）在住。

日時：2013 年 9 月 4 日（水）8:50~9:50／採訪点：東江隊（東）【南三歩墾】

◆八卦洲に来た経緯と当時の情況（1940 年代）

Ego は安徽省来安県の生まれであるが、1931 年に長江で洪水が起こり、六合へ移ってきた。そして家族を六合に残したまま、18 歳の時に（数え年と思われる。おそらく 1941 年）、一人で八卦洲に来た。18 歳で結婚し、間もなく子供が生まれた。八卦洲に来たきっかけは、六合にいる時に、金持ちに八卦洲開墾のために集められたからだという。また、八卦洲に来てすぐの頃は、「做工」（雇用の肉体労働）もしていた。

八卦洲は、民国十八（1929）年に頭歩埂（「頭歩墾」と同じ区域を指すと考えられる）

を囲墾し、堤防を作った。頭歩埂と二歩埂の開墾時には、100 畝の墾地に加えて 8 畝の宅地・菜地がもらえた。その後、開発が進むにつれて土地の価値が上がり、三歩埂の開発では 92 畝しか支給されないうえ、宅地や菜地もそこに含まれていた。堤防の作り方は「蘆墾」で、蘆を積み上げた後に土で固めるやり方である。

◆解放後の農業

解放後に自分の土地で耕作し始めた。耕作地では水がたくさん出るため、一毛作しかできなかった。当時は、小麦を 1 畝あたり 300 斤収穫できた（11 月に播種、陽暦 6 月に収穫）。収穫した小麦は、農貿市場で売っていた。なお、解放前の 1947 年にアメリカ製の抽水機（排水用）が、八卦洲に来たという。

◆燃料について

八卦洲では、1980 年代にプロパンガスが入った。それ以前は、かまどを使い、農作物の茎稈を燃やしていた。なお詳細は不明だが、この話と関連して、農民には「票」がなかったために、買えないものがあったということである。

◆その他

八卦洲では、旗人についての話は聞いたことがない（かつて八卦洲にあった旗地についての質問に対する回答）。また、かつて上壩に萬字会（卍会）があったのを知っている。解放後に行われた査田定産の時に、肖月波という大地主がいた。そして、自分が住んでいる三歩埂（南三歩墾）は、六合からの移民が多く住んでおり、一方で七里洲は南京人が多かったという。

Ego は、八卦洲に来た経緯で、「金持ちに八卦洲開墾のために集められた」と言っている。これは、Ego が八卦洲に来た時期や居住地から判断して、前述した日本占領時期における三歩墾での開発の話である。また、八卦洲に来た直後に行っていた「做工」（雇用の肉体労働）での具体的な仕事内容については語らなかったが、堤防の作り方の発言から、開発に関するものも含まれていたと推察される。一方で、江心洲の開発では、八卦洲で実施された開墾方法が参考にされていたことが明らかにされている。それによると、日中戦争前（1937 年の国民政府期）の八卦洲三歩墾における堤防建設の方法は、頭歩墾や二歩墾での堤防建設のように業主である南京市と借地する佃農が建設費を折半するのでなく、佃農が堤防建設を引き受け、自身の労働力を用いて堤防を作るというものであった［片山 2014、pp.46-49］。また、前掲の「八卦洲墾佃概況」では、三歩墾における二度の開墾をともに「放佃」と説明し、頭歩墾・二歩墾とは区別している[9]。つまり、三歩墾での二度の開墾は、ともに佃農が堤防建設の責任主体となる方法が採用されていたということである。これらの点から、Ego の言う「金持ち」は堤防建設の責任主体となった佃農であり、Ego は彼らが行う堤防建設のために雇われて八卦洲にやって来たと考えられる。

なお採訪では、「地主」や「土地入手」の話が出てくる。当時の八卦洲は市有地、すなわち業主は南京市のため、ここでの土地を得た者とは、南京市から借地している佃農となる。

[9] 前出「八卦洲墾佃概況」『南京市政府公報』4-4、1948 年、p.90。

そして大佃農の場合は、「地主」（いわゆる「二地主」を指す）と呼ばれていたようである。このような呼び方は、後掲の採訪でも確認され、現地では一般的であったと推察される。

Ego によれば、三歩墾では、入手できる土地の面積が墾地と宅地・菜地の合計 92 畝と、それまでと比べ少なかったという。当地の開発は南京国民政府期に始まるが、Ego が八卦洲にやってきたのは 1940 年代前半なので、これは日本占領時期のやり方だったと推測できる。これに対し、1929 年に本格的な開発が始まった頭歩墾や 1936 年の二歩墾では、100 畝の墾地とは別に 8 畝の宅地・菜地（合計 108 畝）がもらえたという。一方、1931 年制定の「南京市八卦洲農地租佃規則」第三條では、毎戸が南京市政府から受け取る面積は 5～100 畝と定められている[10]。この規定は 1933 年に 10～100 畝と修正されるが[11]、上限は変わらない。ここから、1930 年代の南京市政府による開発では、規則にある 100 畝は墾地のみを対象として実施され、宅地・菜地は別扱いだったこと、面積は規則に従って渡されていたことの二点が分かる。なお、本稿末尾の**【補足】**参照。

採訪②：Ego　張 Jc（男性）

1928 年 9 月生まれ。採訪当時、満 85 歳。長江 10 隊在住。

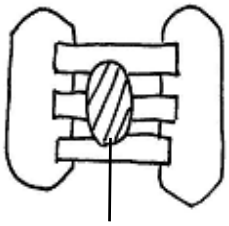
日時：2013 年 9 月 4 日（水）10:15~11:10／採訪点：長江 10 隊【七里洲】

◆幼少時の八卦洲（1940 年代）

Ego は、八卦洲の上流側に位置する七里洲で生まれた。家の場所（採訪地）は、「四心圩」付近で、老家は南京であった。13 歳の時、七里洲で「放牛」（牛飼い）を始めた。牛飼いは、弟もやっていた。牛は誰が持ってきたのか分からないが、安徽省無為県から水牛を連れてきた。父親は蘆葦を船で南京市の下関へ売りに行っていた。蘆葦は、燃料として価値があった。祖父母は 2～3 畝の土地しか持っておらず[12]、家は貧しかった。そのため、土地改革の時は貧農に分類された。

◆父親の仕事について

父親は、嫁さがしのために七里洲へ来た。父親は舟を二つ持っており、**図４**のように使った。船は、七里洲から下関へ蘆葦・焼磚・窰厰（窰磚か）を運び、帰りは荷物を積まなかった。六人で二つの舟を使い、1 日 1 往復していた。



板などをわたして、荷物を載せる

図４．船の使い方

[10] 1931（民国二十）年 10 月 23 日核准備案の「南京市八卦洲農地租佃規則」第三條に「每戸承佃畝数、自五畝起、最多不得過一百畝、如化名冒領、即予斥退」とある［『南京市政府公報』第 94 期、1931 年、p.28］。

[11] 1933（民国二十二）年 5 月 15 日公佈の「修正南京市八卦洲農地租佃規則」第五條に「每戸承佃畝数、自十畝起、最多不得超過百畝、如有化名多領情事、経発覚、即予斥退」とある［『南京市政府公報』第 129 期、1933 年、p.6］。

[12] Ego は次の話題で、父親の代に七里洲に来たと言っている。したがって、祖父母の土地は南京市街地の辺りにあったと思われる。なお七里洲は、もとは一つの独立した洲であった（**図２**参照）が、拡大して八卦洲と接するようになり、旧七里洲を含めた全体が八卦洲と呼ばれるようになった。

港は、上呉碼頭を使っていた。碼頭には、日用品・米・油・布を売る店があった。

◆解放後の仕事

1950年から6年間、「当兵」で兵隊に行っていた。その後の1967年頃、水稲を試みた（通常は小麦を栽培）。

◆七里洲の廟

採訪地から少し南に「新華庵」という廟があった。廟は、地主や富農が拝んでおり、如来仏が祀られていた。その理由は、八卦洲の住民の約 70%が安徽省無為県の人で、安徽省では観音や如来が多くあったからだという。なお、八卦洲には、もともと全部で四つの廟があり、残りは「新龍宮」「老官房」「四心圩」である。

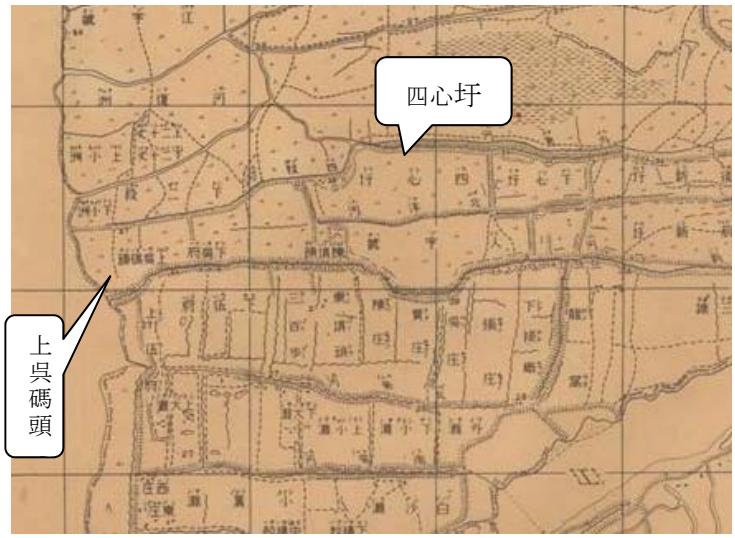


図５．四心圩と上呉碼頭（1937年）
左下が八卦洲の最上流部（大灘・小灘など）

※「南京市街近傍図　二万五千分一」昭和十二年八月製版・発行、同十五年二月複製（台湾中央研究院人文科学連合図書館蔵）を加工。

Egoの話によると、八卦洲上流部の七里洲の中には、河川から水路づたいに入った奥まった場所に小さな港があり（**図５**参照）、そこから下関に、燃料用の蘆葦などを積みだしていたという。また、七里洲には南京からの移民が多いにもかかわらず、八卦洲に安徽省無為県出身の住民が多くいたことを反映して、かつては安徽省でよく見られる如来仏が祀られた施設があった点は、当時の七里洲の社会を考察するうえで興味深い。

採訪③：Ego　曹Zf（男性）

1927年11月生まれ。採訪当時、満85歳。上壩5隊在住。

日時：2013年9月4日（水）11:25~12:40／採訪点：上壩5隊【頭歩墾】

Egoは、街道辦事処辦公室主任である曹徳強氏の父親で、解放後の1949～55年まで、小沙村の村長をしていた方である。

◆八卦洲に来た経緯

Ego は安徽省無為県の生まれで、生後二日で八卦洲に連れて来られたという。父親は、「逃荒」（飢饉のために別の土地へ避難すること）で安徽省からやってきた。特に紹介はなく、隣人と一緒に来ただけである。なぜ八卦洲の存在を知っていたかという

と、もともと農閑期に長江で「打魚」（漁）をしており、南京近くまで来ていたからである。安徽省では、農繁期に稲作を、農閑期には漁をしていた。特に無為県の人は、漁をしていることが多かった。長江下流の方が流れの傾斜がゆるく、魚を捕りやすいこともあって、最も遠い場合は鎮江まで行って漁をしていた。そのため、「八卦洲はよいところで、蘆葦がある」という情報を得ていたのである。

◆八卦洲に来てからの状況（1927～1940 年ころ）

父親が八卦洲に来て最初の仕事は「長工」（地主常傭の作男）であった。Ego は 13 歳の時に「放牛」（牛飼い）をはじめ、後に耕作をすることになった。その時の耕作地は畑 2 畝の広さで、上壩にあった。一年二毛作で、そのうちの一回の作付けは小麦であった[13]。上壩の土地は、下壩のそれより地勢が高く、「囲墾」（Ego の話では、開発のために堤防で囲われた土地を指すと考えられる）の中は、中央が低くなっていた。父親が来た頃は、八卦洲には囲い（堤防）はなかった。父親は、毎年一回「挑埂」（堤防を作る、修築する）の仕事をしていた。作業をする場所は一定しておらず、郷長・保甲長が、毎年決めた。採訪地点は、もともと八卦洲郷 28 保 17 甲に属しており、当時の保長は朱徳康（安徽省無為県の人）、甲長は劉必元（安徽省無為県の人）であった。ちなみに、Ego 本人は解放前に堤防を築く仕事はしていないとのことである。

◆解放前の状況

Ego は八卦洲に来て以来、ずっとここ（採訪地）に住んでいる。解放前には、「囲墾」が数十あり、地名が冠せられていた。例えば、採訪地は「上壩囲」と言った。Ego の土地がある 28 保 17 甲に住む人は、同じ地域（安徽省無為県）からの移民が多かった。八卦洲では、移民の出身者と住地に偏りが見られた（**図６**参照）。

◆解放後の状況

1966 年に水稲耕作を試みたが、今はやっていない。また詳細は不明だが、土地改革の時に、南京市政府に何かの登録（「登記」）をしたとのことである。

◆八卦洲の地主と農地

Ego が農地を借りていた地主は、張金全である。彼は八卦洲在住で、24 畝の土地を持っており、その全てを Ego が借りていた。地主の張自身は、「粮食行」や「魚行」といった店を経営していた。解放前に大地主はおら

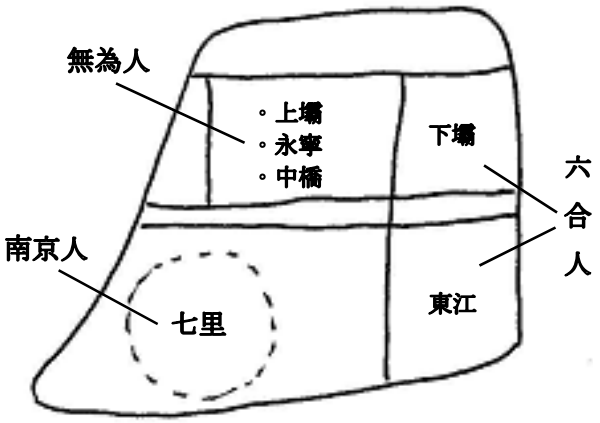


図６．住民（移民）の出身地

採訪①③等をもとに作成

[13] もう一回の作付けは、後出の「トウモロコシ」であったと推察される。

ず、多くの地主はみな 100 畝（108 畝）であった（これは南京市の基準との関係と思われる[14]）。租金は収穫高の六割を支払っていた。解放前もその後も、1 畝の土地から小麦 300 斤が収穫できた。トウモロコシの収穫量は不明だが、1 畝あたり 500 斤くらいではないかと思う。

◆燃料について

現在の燃料は、大豆の茎稈、トウモロコシの茎稈・枝と実の部分の芯など、農作物から得ているという（その後、実際にお宅の炊事場を見せていただく）。

◆萬字会（卍会）について

近くの Tuo 路街にあった。会長は劉蘭亭（八卦洲人）で、彼の弟は劉三という名だった。Ego の話によると、八卦洲萬字会は、1937 年にできたキリスト教（プロテスタント系）の団体で、アメリカ人と関係をつくりお金を集めていたという[15]。

採訪④：Ego　黄 JI（男性）

1928 年 5 月生まれ。採訪当時、満 85 歳。長江 2 隊在住。

日時：2013 年 9 月 4 日（水）13:40~15:00／採訪点：長江 2 隊【頭歩墾】

◆八卦洲に来た頃の情況と家族（1940 年代）

Ego は 17 歳で八卦洲に来た（数え年と思われる。おそらく 1944 年）。もとは南京に住んでいたが、両親は貧しかった。八卦洲に来て以来、ずっとここ（採訪地）に住んでいる。来て最初の頃は「討飯」（ものもらい）をしていた。父親は国民党員で、徴兵されていたが、後に南京へ逃げてきた。八卦洲に来てからは仕事がなく、先に父が、まもなく母も死んだ。当時の八卦洲の人口は少なかった。1951 年に、弟が徴兵されたが、Ego は徴兵されなかった。

Ego は、15 歳で「放牛」（牛飼い）を始めた[16]。解放前は耕作せず、農業以外で働いていた。1947～49 年に「瑞鑫興」という食品や日用品を扱う雑貨屋で、住み込みで働いていた。店は上壩にあり、「老闆」（店主）は王氏（性別不明）だった。働いていた店は大きく、全八卦洲の人がそこを利用していた。当時の八卦洲の交通手段は、すべて徒歩である。八卦洲にある他の店は基本的に小さく、上壩 2 隊付近にも店があったが、それほど大きくはなかったという。

◆萬字会（卍会）と安清帮

萬字会は、劉大（劉蘭亭のこと）が会長だった。彼の弟は劉三といい、地主だった。

---

[14] 「基準」については、註 10・註 11 を参照。時期・場所から、採訪①に出てくる墾地と宅地・菜地の話と同じことを指していると考えられる。

[15] 萬字会がキリスト教系の団体という話は、2012 年 12 月に辦公室主任から聞いた話と違う内容なので、今後の調査を進めるなかで、確認する必要がある。

[16] ここでは、父の死後に母が勧めたため、11 歳の時に学校で勉強したとの話も出てきたが、直前の話とは合わない。

彼もまた、会の頭目だった。安清帮の「頭子」は謝金元であり、彼の籍貫はよく分からないが、上壩に住んでいた。謝金元は安慶人ではない。民国期には土匪が多く、安清帮が「行業」を壟断していた。また、けんか（「打架」）もしょっちゅうだった。当時は、八卦洲以外にも安清帮がいたが、萬字会との関係はなかったという。

◆解放前の燃料

解放前は、トウモロコシの茎稈、そのほか諸々の植物を燃料として活用していた。一方で、蘆葦を日常生活で使うことは少なかったという。

◆飲料水について

雨が降ると畑が水に漬かり、「河」（用水路）の水位があがるので、用水路の水を利用していた。今は、長江から引いた水道水を使っている。

Ego は、萬字会に関する話の中で、安清帮という団体に言及している。安清帮は、萬字会とは関係がなく、また「頭子」の謝金元は安慶人ではないという。したがって、ここで出てくる団体は、安慶帮ではないと思われる。この団体については、上海の青帮と関係があった可能性も想定しつつ、今後のさらなる調査が必要である。

解放前の八卦洲では、燃料として農作物の茎稈が用いられていた。農作物の茎稈を燃料にするのは、採訪①③の話から、解放後も同じであったと推察される。また採訪②から、ここでも蘆葦を自分たちでは使わなかった理由として、燃料として価値のある蘆葦を南京市街地へ出荷し、お金にかえていた可能性を指摘できよう。

採訪⑤：Ego　葉 Xy（男性）

1928 年 8 月生まれ。採訪当時、満 85 歳。螞蟻村 112 号在住

日時：2013 年 9 月 4 日（水）15:20~16:30／採訪点：螞蟻村 22【二歩墾】

◆八卦洲に来た頃の状況と家族（1930～40 年代）

Ego は、安徽省無為県で生まれ、1931 年に八卦洲へ来た。しばらくは、安徽省と八卦洲を行き来する生活であったという。1948 年に八卦洲に定住する。父親が八卦洲に来た理由は、はっきりとは分からないが、友人との関係を頼りに無為県から移住したという。無為県に持っていた土地は 2 畝と狭かったので、そこを売り、その代金で八卦洲（後の話から頭歩墾と分かる）により大きな土地を買った。家族構成は、父母兄弟妹（妹は八卦洲で出生）と本人の六人で、父親は 1942 年に死んだ。また弟も、病気で 1944 年に亡くなった。

◆解放前の状況

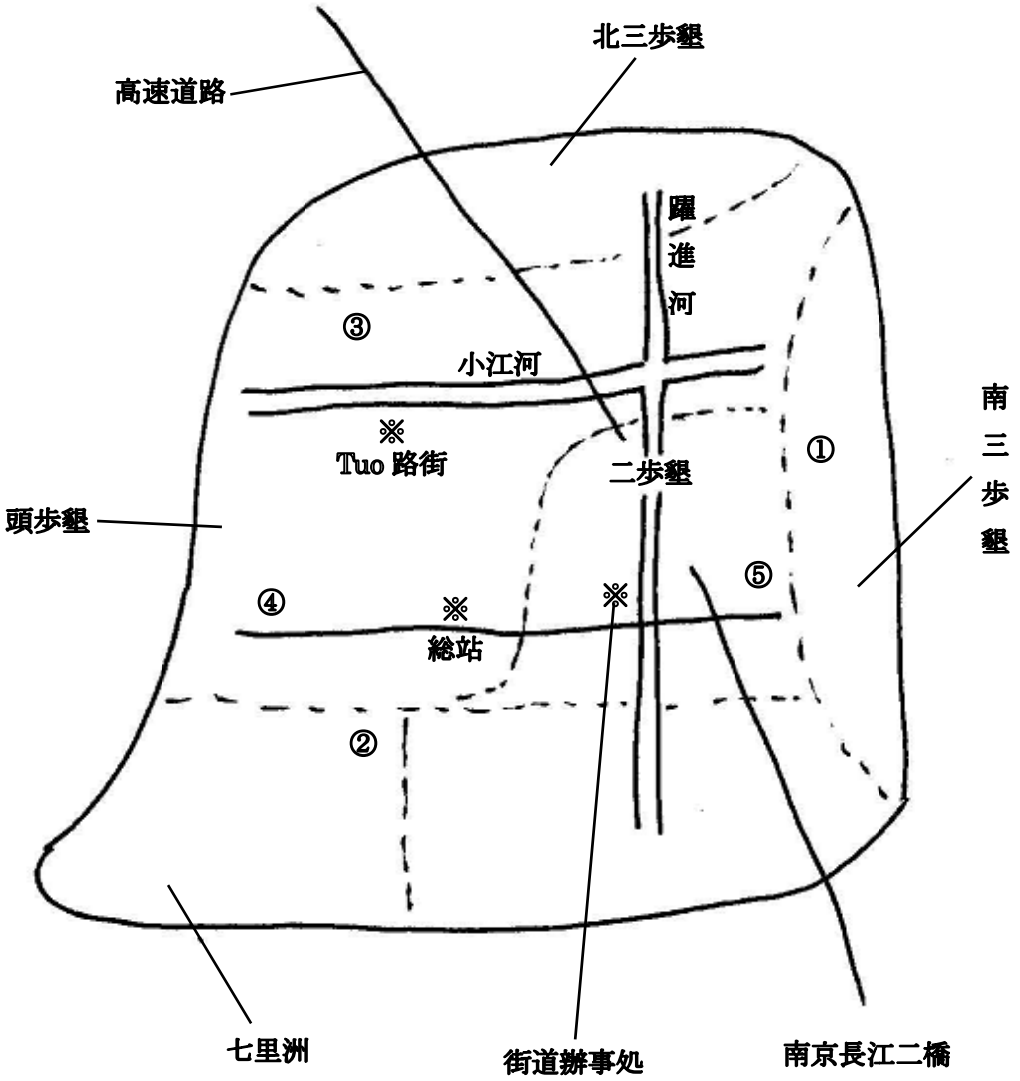
畑の半分は毎年水に漬かった。蘆葦は根が深いので 1.5m ほどの棒で掘り起こして開墾した。土地は肥沃だったので、来て 10 年は肥料がいらなかった。1949 年頃、上壩のある頭歩墾から引っ越した。頭歩墾の土地は狭かったので（何畝か不明）、四壠（場

所は不明）に 40～50 畝の土地を手に入れた。その後、二歩墾にある現在の土地（100 畝）に移る。二歩墾の土地を誰から買ったか、値段はいくらだったかは、覚えていないという。

◆八卦洲での仕事

父親は、農閑期に「打魚」（漁）をしていなかった。八卦洲には、肖月波という地主がいて、100 畝強の土地を所有していた[17]。当時（おそらく解放後）は、小麦とトウモロコシ（または黄豆）の二毛作で、小麦は半年で 8 担＝800 斤の生産量だった。Ego と妹は「読書」「打工」をした。Ego は、1948 年に蕪湖安静中学を卒業後、その年か翌年に耕作を開始した。1951 年に、治淮工程に動員されたが、八卦洲を開墾した経験はないという。ちなみに、土地改革の時、兄は地主に分類されたという。

■採訪地点



[17] 肖月波は、採訪①でも査田定産時の地主として登場している。

◆八卦洲の学校について

解放前は、上壩・下壩・双柳[18]に小学校があった。Ego は、下壩の小学校で学んだという。授業は普通話に近い「政府話」で行われていた。ここ（採訪地）は、江蘇省六合県の人が多い。六合県の言葉は南京に近いが、安徽省無為県の言葉とは、かなり違った。

◆燃料について

解放前の燃料は、小麦（上半年）とトウモロコシ・黄豆（下半年）の茎稈だった。他に、樹木も使っていた。ちなみに、当時の家屋は小麦の茎稈を使った草房だった。

最後に、科研メンバーの荒武達朗氏から、＜安清幇との関係で、謝漢平という人物＞について質問することを依頼されていたので、これをたずねた。Ego は知らなかったが、副主任の呉昌明氏は面識があったという。呉氏の話によると、謝漢平は 1987 年に 90 歳代で亡くなった。おそらく保長をやっていたとのことである。また Ego に、査田定産の時の話を聞くと、耕作地の土地は馬干土で、他に沙土もあるとの回答だった。

３．おわりに

以上、2013 年に実施した八卦洲調査についてまとめてきた。これにより、これまで文献から想像していた様子とは異なる、八卦洲の新たな一面を窺い知ることができた。今回の採訪を整理すると、次のようになる。まず、八卦洲のインフラ整備についてだが、採訪の中で、移住の理由に金持ちに集められ堤防建設に従事したとの言があった〔採訪①〕。また、堤防工事の割り当てなどもあったという〔採訪③〕。これは、江心洲の開発とも関連する興味深い話である。第二は、八卦洲のことを移住者はどのように知ったかである。もともと文献や江心洲での聞き取り[19]から、南京市の中洲には、安徽省無為県からの移民が多いことは分かっていた。しかし、彼らが事前に現地の情報をどのように得ていたかは疑問であった。今回の採訪から、その情報源の一つとして、「打魚」（漁）を通じて八卦洲のことを知り、飢饉を避けるために、未開墾の八卦洲に移住するという事例があることが分かった[20]。第三は、1930～40 年代に生産していた蘆葦と燃料の問題である。刈り取った蘆葦は、南京市に運んで市民の燃料に供された。一方で、八卦洲の住民は、蘆葦でなく作物の茎稈や樹木を利用していたという。ここから、蘆葦は商品としての価値が高く、開発初期段階において収入（おそらく現金）を得る手段の一つになっていたと推察される。

今後は上記の点に留意しつつ、引き続き聞き取り調査や関連する資料を収集し、分析することが課題となる。特に、今回あまり話の出なかった開発について、さらなる聞き取りを行う必要がある。これらによって、八卦洲や江心洲をはじめとする長江の中洲の開発史

---

18 八卦洲には、これらに復興河を加えた四つの市立小学校があった［大坪 2008、p.85］。

19 江心洲での聞き取り調査については、大坪・片山 2007 を参照。

20 実際に移住する時に、個人で行く者が多かったのか、それとも開発の出資者による募集があったのかについては、今後の実地調査の課題となろう。

や、民国期の南京を中心とする社会などの全体像が具体的に見えてくるように思われる。

【補足】

1931 年 10 月 23 日「核准備案」の「南京市八卦洲農地租佃規則」(『南京市政府公報』94 期、1931 年 10 月 31 日）によれば、租佃できる面積は 5 畝～100 畝であるが、佃戸が必要とする「宅地、晒場、水塘、菜地等の用地」は、租佃面積に応じて、5 畝ごとに 1 分半（0.15 畝）が賃料なしで支給される。つまり 100 畝なら 3 畝が加給される。

1933 年 5 月 15 日公布の「修正南京市八卦洲農地租佃規則」(『南京市政府公報』129 期、1933 年 5 月 31 日）によれば、租佃できる面積は 10 畝～100 畝であるが、佃戸が必要とする「宅基、晒場、水塘、菜園等の用地」は、租佃面積に応じて、「毎ママ畝で 8 分（0.8 畝)」が賃料なしで支給されるとある。しかし、これは次の 1934 年の規則を考慮すれば、「毎十畝 8 分」の誤植と思われる。

1934 年 3 月 31 日「核准備案」の「修正南京市財政局八卦洲農地租佃規則」(『南京市政府公報』139 期、1934 年 3 月 31 日）によれば、佃戸が必要とする「宅基、晒場、水塘、菜園等の用地」は、租佃面積に応じて、「毎十畝で 8 分 (0.8 畝)」が賃料なしで支給される。つまり 100 畝なら 8 畝が加給される。

なお、同じく市有地であった同時期の大小黄洲については、1934 年 3 月 31 日「核准備案」の「修正南京市財政局大小黄洲農地租佃暫行規則」(『南京市政府公報』139 期、1934 年 3 月 31 日）によれば、佃戸が必要とする「住所、菜地、水塘、晒場等の地」は、租佃面積に応じて、毎十畝で 5 分（0.5 畝）が賃料なしで支給される。つまり 100 畝なら 5 畝が加給される。

参考文献

大坪慶之　2008「台湾収集の民国期南京における旗地関係档案」『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3、pp.79-90。

大坪慶之・片山剛　2007「2006 年南京市江心洲調査報告」『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』2、pp.141-156。

片山　剛　2014「20 世紀前半、長江中洲の開発と開発農民の具体像―南京市付近の中洲を中心に―」『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』5、pp.39-57。

朱海濱・大坪慶之　2014「2012 年 12 月南京八卦洲訪問記録」『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』5、pp.100-102。

山本　真　2006「中華民国期、南京市における旗人生計保護と旗地の整理（1912-1937)」『清朝における満・蒙・漢の政治統合と文化変容』pp.17-50（平成 14～17 年度科学研究費報告、研究代表者：楠木賢道)。

周　志斌　1997「民国時期南京八卦洲的開発利用」『学海』1997-5、pp.99-102。